

「能登、まだ人手不足」

松波病院職員 支援活動振り返る

松波総合病院介護老人保険施設(笠松町田代)の介護福祉士2人が、金沢市の能登半島地震の避難所で、要介護高齢者の介助に当たった。活動から戻った2人は「避難所の外では日常生活が送られ、時間が止まっているようだった」と振り返り

返った。

高橋勇太さん(41)と宮崎久美子さん(49)が、厚生労働省などからの要請でいし

能登半島地震の避難所で介助に当たった高橋勇太さん(左)と宮崎久美子さん。笠松町田代、松波総合病院介護老人保健施設



かわ総合スポーツセンターに2日間入った。同センターは高齢者がホテルや仮設住宅といった2次避難先に入るまで一時的にとどまっている「1・5次避難所」。2人は他自治体からの職員とグループになり、高齢者の食事や入浴の介助、健康チェックを行った。

2月にも同センターへ派遣された高橋さんによると、引き継ぎの書式が整うなど進捗がある一方で、まだまだ時間や人員が足りず、「十分なケアができないうもどかしさがあった」という。「最低限のことをやり、今日を明日につなげる一心だった」と話した。被災地での活動は初めてで「家族や家についてどこまで踏み込んで聞いているのか悩んだ」と宮崎さん。センター内ではスポーツジムを使う一般市民がいたり、観光客が歩いていたりと「避難所の中だけ異空間だった」と思い返した。

(安井真由子)